

神奈川歯科大学・被災者支援プロジェクト

～ 第5回 本格支援までの情報収集および現地視察等・陸前高田 ～

報告者：インプラント科
笹倉裕一

【日程】

平成23年8月28日～8月30日

【参加者】1名

笹倉裕一（歯科医師・附属病院 インプラント科）

遅ればせながら陸前高田 一気の抜けたサイダーは行く

今年3月11日の東日本大震災では9月20日現在で15,799人の尊い命が絶たれ、まことに慚愧の念に堪えません。心から亡くなった方々のご冥福をお祈りする次第です。この地方の大震災は千年に一度襲来することが明らかになりましたが、人間にとって千年という年月は永遠と同じなので、被害に遭われた方々してもなかなか現実の災害として襲来予測が立たなかったのも無理はありません。

今震災・大津波による激甚災害の救助・救済活動としてその直後、日本歯科医学会を通じて、神奈川歯科大学にも派遣要請が来ておりました。私のメールにもそれは入っていましたが、小市民・中間管理職のつらいところで予定がビッチリと入っていて、とても身動きが・・・、といった状態でした。それから5か月、報道を見るにつけ災害に遭われた地域の人々の力強い復興に対する思いを感じておりました。そしてまことに遅ればせながら陸前高田に出動と相成りました。

陸前高田市には私の大学時代の同級生が開業しており、彼も等しく今回の災害に遭い、大きな犠牲を払いました。いわゆるボランティア活動では単独で被災地に入りこれを行うことは援助効率、危険性の点から勧められません。やはり現地の情報を把握しているカウンターパートを見つけ、その情報と行動力に従い安全かつ効率的に行うことが求められます。私はこの10年、ベトナム北部に散在するハンセン病患者の施設の歯科治療活動に毎年参加していますが、彼の地における活動では何が重要かという点、援助しようとする当該地域のカウンターパートの情報量と処理能力にかかっているということを痛感しています。このような点から私のように震災後5か月もして被災地に入るのは、情報を多く得るという点において活動を行うという点では非常な有利でありましたが、今震災などは急を要する出動であるがゆえに、今ごろのっそりと災害地に参上するのは、まことに気の抜けたサイダーに等しいように思えます。ともあれ私は今災害が国難であると心得ていますので、たとえ気の抜けたサイダーと揶揄されようと国民の応分の責任を果たすべく陸前高田に医療援助の名目で、この同級生の仮設診療所に赴きました。

8月27日夕刻、電車とレンタカーを乗り継ぎ陸前高田に到着し、すぐさま日が暮れないうちに津波にさらわれたかつての商店街やいろんな建築物があったであろう海辺の平坦地を見て廻りました。震災後すでに5か月が経っていますので津波が残っていたあの夥しい被災物は材木とか自動車とかの物品にわけられ、一定のところに集積してありました。この分別作業は主に自衛隊の方々によって行われたそうです。今回の自衛隊の方々のご活躍は目を見張るものがあり、山となったがれきを人力で分別し(写真)その中にご遺体がないかを確認しつつ作業をされたと地元の方から聞き及びました。司令官の命令とはいえ、本当によくやって下さったと思います。



陸前高田市の沿岸部にあった8軒の歯科医院はすべて津波に流されました。その中で私の歯科医療援助のカウンターパートとなった吉田歯科医院のスタッフは全員生存されておりましたが、一方で従業員一人を残して全員、そして診療所建物も波にのまれてなくなったところもあったと聞きました。陸前高田市の人口は約2万3千人、そのうち2千人が津波にさらわれたわけですが、その2千人は沿岸部にいた人たちでありませんが山間部の人たちが沿岸部に働きに出てきていることを考え合わせても、沿岸部の人たちの犠牲率は非常に高いことが推察されます。

写真に示すのは津波で圧縮された救急車で、大きな圧力をかけた発泡スチロールの様になっており、いかに強大な圧力がかかったかが想像されます。



商業施設は平地にありましたが、**写真**に示す通りで堤防まで視界を遮るものはいくつかの鉄筋コンクリートの建物だけでした。鉄筋コンクリートの建物といえども、100mほど山側に入ったところでは、ほぼ消え去っていました。



これは津波が建物を壊しながら内陸に向かって流れるため、津波と破壊物が一緒になりさらに破壊力を強くしたためといわれています。気仙川を駆け上がった津波は川から溢れ出ながら周囲を巻き込み河口より約 3km 上流の大船渡線の鉄橋までも破壊しました(写真)。



震災後、陸前高田市の歯科診療は今回の支援を受け入れてくれた吉田歯科医院が最も早く仮設診療所を立ち上げ、地域歯科診療の回復を企図しました。このように根こそぎやられた災害では、多くの場合茫然自失となるのが通常と考えられますが、彼の卓抜した行動力、意志の強さに感銘を受けた次第です。平常時、立派な事を言っている人も、いざ緊急事態が起こるとその馬脚を現します。すなわち、何か一旦緩急があったときのその人間の行動はその人間の本当の姿を露にするといいいます。外国の記者たちが、なぜこんなにも被災者の皆さんが整然と行動出来るのか、完全な自治を見せつけるようだと称賛しています。なんと東北地方の方々の忍耐がよく、誇り高い事でしょう。



吉田歯科医院の仮設診療所には一日に約 40 名の患者さんが受診され、エックス線撮影装置も口腔内用の小さなデンタルエックス線写真というものしか撮れませんでした。なんとデジタルでした。治療は一般的な開業歯科医院で行う治療はほぼ問題なく可能でした。歯科治療自体はそれほど緊急性のあるものではなく、待機的に行っても生命の予後に大きく関る事は多くありません。ただ、歯痛や噛めない事は摂食不良という自体を引き起こしボディーブローのように体力を奪っていきますから、出来るだけ早く歯科診療施設を確保する事は重要であることに論を待ちません。

私が第1日目のボランティア歯科診療を終えたその夜、吉田君の知り合いの先生と夕食を共にしました。そこで興味あるエピソードを耳にしたのです。それは歯科材料の納入業者の件でした。納入業者 A は震災二日後、盛岡から炊き出しの握り飯を持ってきて“先生大丈夫か！ え？材料の支払い？ そんなものはいつでもいい。とにかく命があって良かった”。一方、納入業者 B は震災後郵便配達が復旧してすぐに1万8千円の請求書を送ってきたそうで、電話が通じたらまた請求の電話。もちろん1万8千円は後ほど支払われましたが、納入業者 B とはこれで取引終了です。これら納入業者の名前を聞き、私は知っていますが納入業者 B とは何があってもここで取引をしようとは思えません。商売にも品格が必要と思うのは私だけですかね？

診療は日ごろ行っている事の延長でしたが、歯周病を患った患者さんが多かったような印象を受けました。それも重度で、抜歯の適応が多くありました。恐らく震災・津波そのもののストレスや仮設住宅での精神・身体的負担によるものかも知れません。



そんなこんなで、年齢 57 にして激甚災害の傷跡から多くを感じ学んだ、我が身を振り返る気の抜けたサイダーでした。

稿を終えるにあたって、亡くなられた方々、被災された方々には本当にお悔やみの言葉は見つかりません。しかし命のある限り希望はあります。私を慈育してくれた祖母が良く言っていました。“明けぬ夜はない。山より大きな猪はいない”と。